

【指導教員】野村 泰朗 准教授 萩生田 伸子 准教授

【キーワード】実践研究者 エビデンスに対する見方・考え方 質的データ 量的データ

1. 研究背景

情報社会の幾何級数的な進展の中で、問題解決に PDCA モデルの考え方だけでなく、ビジョン思考が求められている。教育においても動的平衡による安定を重視しなければならない。そのため、教師が実践研究者として能動的に変革に向けて行動する際、自信をもって行動を選択するには、上手なデータ活用が必要だと考える。本研究では、教師が実践研究者であるために必要なエビデンスに対する見方・考え方を明らかにしていくことを目的としている。

2. エビデンス

本研究では、エビデンスを教師が意思決定の確信度を高めるデータの集合と位置付ける。教師の勘や経験則に基づく感覚的な印象だけを頼りにするのはなく、科学的な調査方法に基づき得られたデータのみをエビデンスとなるデータとする。しかし、ここでは、量的データだけでなく質的データも含めたエビデンスとなるデータを位置付ける。そして、特に教育実践において厳密な定義や活用方法の合意がないエビデンスに対する見方・考え方を明らかにすることで、「エビデンスに基づく」教育実践の具体的な取り組み方を見出せるのではないかと考える。

3. 研究方法

本研究では実践の記録を研究対象とする。児童を高める力を育てる指導モデルを構築する過程を回想し記録として書き起こした。実践の目的に向け、仮説を立てたところからはじめ、どのような仮説検証を行なったのか、記録から分析する。

4. 教師のエビデンス活用モデル

教師が実践研究者として変革に向けて行動していく際、その選択の根拠となるエビデンスとどのように向き合うのか、筆者の実践研究の記録分析を基にモデル化した(図1)。

図1 教師のエビデンス活用モデル

	情報収集	分析	判断・選択
問題発見・問題分析	1	2	3
1	「教育的テーマだけでは学習者一人一人が何をどのようにまで意識しているか把握することができない。教育テーマが学習者全員が何をどのようにまで意識しているかを把握する必要がある。多くの面から教育テーマから学習者を観察する。」		観察を通していく部分の検証
目標設定	4	5	6
1	「過去の授業と学習者の自己観察結果を比較すると学習や学習の状況は、ポートフォリオと過去の教育データをそのまま取り出すのではなく多面的に教育テーマを取り出す。」		多面的な観察・検証
代替案の生成・選択	7	8	9
1	「教育的テーマを教育テーマでは意識できなかったとしても、学習者自身が気づくことができるように、考えていくこともできる」と判断、行うことができる。意識的な行動であったことを観察する。教育テーマから学習者を観察する。」		代替案の選択
実行・評価	10	11	12
	「大規模調査等から得られた情報は実践の検証に役立つ。これらから、データ活用が実践テーマからデータを収集する。」		実践の達成度を検証する

5. まとめ

エビデンスの見方・考え方

- ・概念の定義と児童の日常経験知を比較すると差異や矛盾が生じるため、質的データの代替案を生成し、質的データの中でも多面的に見取る。
- ・評価観点を代表する指標は、複数のデータから間接的にしか知ることができないため、何のためにエビデンス得るのか明確にしておく必要がある。
- ・量的データは特定の面からしか実態を捉えられないため、多くの量的データを収集し、多面的に学習者の実態を捉えられるようにする。
- ・量的データだけでは、学習者が何をどのようにどこまで理解しているか見取れないため、質的データから見取る。
- ・規模大調査等から得た情報は実践の達成度とイコールにはならないため、データ項目や素データからもデータを見取る。

エビデンスの見方・考え方の必要性

筆者は、量的データから児童を一部分でしか捉えられていなかった。しかし、仮説検証の8段階を通し、素データなどから個々の児童を多面的に捉える変容があった。ここから実践研究者にとってエビデンスの見方・考え方に必要性があることを示す。同時に、物事的前提が常に変わる社会の中で、全てを見取ることができないという前提から、エビデンスの限界性を自覚する必要がある。限界性を自覚し、社会の認知を促すエビデンス。問題解決の繰り返しを助けるエビデンス。環境により効果に変化する教育の中にあるエビデンス。これらとの向き合い方にも、より詳細な検討が望まれる。

主な参考文献

今井康雄, 2015 「教育にとってエビデンスとは何か—エビデンス批判をこえて」『教育学研究』第82巻  
 石井英真, 2015 「教育実践の論理から「エビデンスに基づく教育」を問い直す」『教育学研究』第82巻